

「波ざる」の復刻と職人技を取り巻く現状

野村正弘・大久保博樹

【要旨】 波の音を作成するための道具「波ざる」を復刻した。復刻した「波ざる」を一般市民に体験してもらった事業を設定し、職人技の重要性を再認識する機会とした。体験では、波音を作成することは比較的簡単であるが、映像に合わせた臨場感まで作り出すことは非常に困難であることがわかった。また、小道具の保存と併せて音作りの思想の継承とその方法の重要性が、「波ざる」の復刻を通じて確認された。さらに、これまで日本文化を支えてきた竹籠や団扇という職人技も絶滅寸前であり、デジタル技術を用いた保存・伝承が急務である。

【キーワード】 「波ざる」、効果音、保存、復刻、職人技

1. はじめに

「波ざる」は音響効果技師が波の音を作成する場合、なくてはならない道具である。筆者らがこれまでに得た情報から、アナログ効果音全盛時に使用された「波ざる」はすでに廃棄され、国内には1点あるかないかという状況であることがわかった。

元ニッポン放送音響効果技師の南二郎は、退職後北海道に居を移して仕事をこなしつつ、アナログ効果音の保存・普及に尽力してきた。その中には道具の復刻・保存も含まれている。2009年10月、筆者らは南の技術をデジタル化して保存活用するため、取材を行った。その際に、南が使用していた「波ざる」は、アルミパイプと金網で籠を作製し、内側に渋紙を貼ったものであった。南によれば、現役当時に使用していた道具の多くは当時の材質・形状に復刻できたものの、「波ざる」は特殊な形状の竹籠が入手できず、仕方なくホームセンターで自力加工が可能な材料で間に合わせたとのことであった。

そこで、平成22年度駿河台大学特別研究「音響効果技師による効果音の制作技能及び思考過程のデジタルアーカイブ化と公開」の一環として、「波ざ

る」を復刻した。南の道具に関する記憶を具現化し、その道具を使ってアナログ効果音全盛時と同じ音を制作・保存しておかなければならないと考えたからである（大久保・野村、2010）。

以下に、この取り組みをまとめ、その過程で見えてきた問題点等に言及する。

2. 記憶の文書化

南が作製した「波ざる」の静止画・動画は撮影してあったので、サイズと使用方法はわかっている（図1）。しかしこれだけでは、竹と和紙でできた「波ざる」を復刻することはできない。

そこで、南にアンケートを送付し記憶を文字化してもらった（図2）。竹の編み方については、駒ノ旺竹工房 web サイト「編組パターン見本」を参考にした。取材データおよび南からのアンケート回答をもとに、野村がラフ設計図を作成し、竹籠職人と面談して調整しつつ製作を進めることにした。

本特別研究の目的は、南の作る音とその技をデジタルアーカイブ化し、それを使って道具を復刻することであった。しかし、全データのアーカイブ化ま



図1 南製作の「波ざる」

でが完了してからでは、南の健康状態により復刻が難しくなる可能性が高いとの情報が寄せられ、今回の方法に切り替えた経緯がある。

3. 竹籠の製作

いざ竹籠の製作となると、受託してくれる職人を捜すことから始めなくてはならない。インターネット上で検索された情報で名称が“竹細工店”となっても、製品販売のみで製作は行っていないケースが多い。埼玉県内で数店、製作をしているのであ

う店を探し出した。しかし、竹細工製作ができて、大型の籠を製作できるとは限らず、あとは電話での確認・交渉とするしかなかった。

幸運なことに、本学近くの入間市にある『大久保竹籠店』の大久保国夫に電話を入れたところ、話を聞いてくれるとのことで早速店へ出向いた(2010年6月30日)。南の「波ざる」実演写真・アンケート回答・野村作成のラフ設計図を見せ、お願いしたところ承諾してもらった。さすがに、これだけの大型製品の製作はしたことがなかったこと、できるだけ軽く丈夫に製作してほしいとの要望したことから、編み方だけではなく全体の工法について考える時間がほしいとのことであった。特注品を数多くこなす、竹籠一筋60年以上の経験を持ってしても、簡単に受託できる製品ではないことがわかった。

特に大久保国夫は、南の指定方法で編んで渋紙を貼ると、籠全体がかなり重くなってしまおうので編み方の変更をしても良いかと言う。職人の勘に任せて、編み方はお任せすることにした。また、南の体格・体力を気にしているようであった。あまり体格の大きくない南が、振るのに支障のない重さにこだわった結果であり、使用者に満足してもらえる製品を作りたいという職人の意地を強く感じた。そこで、南の要望をできるだけ取り入れてほしいという最低減の要望を伝え、店を後にした。

<p>1. 完成サイズについて</p> <p>縦=() cm 横=() cm 高=() cm</p> <p>その他に意見・ご希望</p> <p>見目 草葉のしぼりかたは、そのほかの竹籠と異なり、お好みのしぼりかたでお願いしたい。また、底の厚みも、お好みの厚みでお願いしたい。</p>	<p>4. 竹の編み方について</p> <p>別紙(編組見本)をご覧ください。ご指定ください。 <small>(職人さんの相談で変更になる可能性もあります。ご承知おください。)</small></p> <p>2. 巻掛</p>
<p>2. 完成重量について</p> <p>現在のアルミ製の波ざるより、重くしては、軽くしては、</p> <p>※ アルミ製の波ざるのおおよその重量がおおよそ1.5kg程度です。</p> <p>その他に意見・ご希望</p> <p>① 底の厚み ② 底の材質 ③ 底の形状</p>	<p>5. 貼付する渋紙について</p> <p>糊をつけて貼付してください。お好みの色をお書きください。 <small>糊への貼付については、お好みの色をお書きください。</small></p> <p>下紙の色は、黒、白、茶、赤、青、紫、黄、緑、などです。</p>
<p>3. グリッパの位置・太さについて</p> <p>このグリッパの間隔=() mm</p> <p>グリッパの太さ=() mm</p> <p>その他に意見・ご希望</p>	<p>6. そのほかご意見、ご要望などご自由にお書きください。</p>

図2 南回答のアンケート票



図3 六つ目編み中一本通し



図4 完成した「波ざる」骨格と大久保国夫

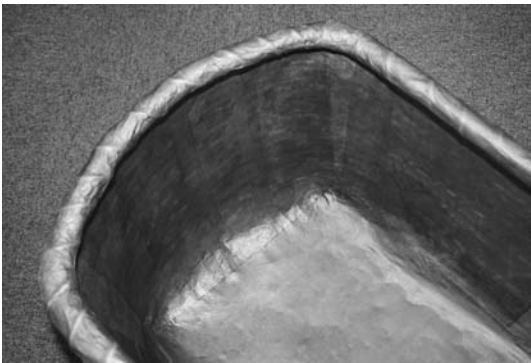


図5 渋紙貼付状態



図6 完成した「波ざる」と島野博行

指定された2週間後、電話をすると手直し可能な状態ではほぼできているとのことであったので、早速来店し確認を行った。編み方は六つ目編み中一本通し(図3)となっており、六つ目編みの軽さに、中央を1本通すことによって強度を持たせたものである。2日間、編み方・曲げ方を思案したそうで、これまでの竹籠製作でこのようなことは始めてだそうです。グリップを持って持ち上げて見たが、その大きさに比して驚くほど軽い。また、振って見るとバランスが良く、振りやすいのである。和紙を貼って重くなることを計算しつつ、側面・底面はできるだけ軽くし、振りやすくした結果なのだそうである。このまま最後まで仕上げてほしい旨を伝え、再び店を後にした。

このようにして、「波ざる」骨格は2010年7月14日、無事に納品となった(図4)。

4. 渋紙の貼付

次のステップは、渋紙を貼付してくれる職人を捜すことである。竹籠職人大久保からは、内装業の人に頼んではどうかという提案があったが、筆者らが渋紙を入手することが困難であることから断念した。渋紙を用意してくれて貼付作業を行ってくれる職人、おそらく提灯店か団扇店のどちらかではないかと考え搜索を開始した。野村の通勤路沿いに団扇店があることを思い出し、電話を入れた。

越生町にある『うちわ工房しまの』の島野博行に電話を入れると、渋紙は用意でき貼付も可能なので、籠を持ってきてみてほしいとあっさり承諾してくれた。2010年7月20日、店へ「波ざる」の骨格を持ち込んだ。この完成品を誰がどのように使用するのか説明すると、この大きさを貼るのは初めて

だがやってみると、言葉少なに引き受けてくれた。適当な強度の和紙を下張りし、その上に渋紙を貼ってくれるよう頼むと、編み目が大きいので引き裂きに強い手漉きの小川和紙を下貼りにすると説明してくれた。こちらの説明を聞きながら、すでに頭の中では使用材料見当もつき、工程ができていたようであった。ここでも職人の勘を信じて、必要な要望を伝え、店を後にした。

2010年7月31日夕方、本学へ渋紙貼付の終わった「波ざる」を届けていただき、無事納品となった。筆者らは渋紙をどこでどのようにつなぎ合わせるのか、全く指示を出すこともままならなかった。しかし、完成品を見ると曲面は渋紙を分割して貼ってあるが、底面は浮き上がりが出ないように大きな一枚ものの渋紙を使用することで、「波ざる」内を滑らせる小砂利などが引っかかることなく移動するように見事に仕上げている(図5)。ここでも職人の意地を見ることになった。

5. 複製品の試用と公開

でき上がった「波ざる」は南に試用してもらって、使用感も含めた諸情報を採取し、デジタルアーカイブの付随情報として残す予定であった。また、一般の方に南が試用する状況を公開すると同時に、触ってもらって普及を図るという企画も用意した。その機会として選んだのが、狭山市立博物館で開催されていた『音のでもおもちゃ展』の関連事業としての実演講演会である。

残念ながら南が急逝され、音職人による試用と公開は叶わなかった。しかし、一般の方に触ってもらう良い機会にはなった(図7)。アンケート結果を見ると、参加者は少なかつたものの参加者の反応は良好であったと言える。映像にきちんと合わせた音というものがいかに重要かを、参加者全員が納得していたようである。このような職人技が消えてしまうことは残念であるという意見も複数出された。

今回公開した複製品の「波ざる」に代表される、いわば効果音を制作するための道具は、一部の音響



図7 狭山市立博物館における公開時の状況

関係の書籍では音を作り出す楽器として紹介されている。そこには代表的な小道具類が簡単なキャプションと共に掲載されている(日本音響家協会編、2001)。

南の指導によって複製した「波ざる」については、書籍では写真のかわりに簡単なイラストが掲載され、ざるに小豆や大豆や米などを入れ、これを揺することで浜辺に打つ寄せる波の音を作り出すとキャプションがついていた。しかし南は、浜辺に打ち寄せる音だけではなく、風の様子、大波、打ち砕ける波頭を、一つの「波ざる」と砂利だけで演じ分けていた。この様子を目にすれば、演じ分けと音の演技は音響効果技師の職人技として、率直に認められるものである。実際、狭山市立博物館では、参加者の何人かが「波ざる」を振り、はっきり波とわかる音を作り出すことができたが、揺すり方の変化に伴う表情を醸し出す難しさも体験的に確認することができた。

また、「波ざる」の中で揺すられるものを小豆、砂利、黒豆と種類を替え、生まれる音の違いを確認した。揺すられる中身が変わると、「波ざる」を同じように振っても明確に異なった質を持つ音が発生し、その表現は大きく変化する。黒豆では大波に、揺すり方によっては遠雷にも聞こえた。

こうした中身についても、音響効果技師たちは職人的な視点で判断していたようである。以前、砂利の粒の大きさ、種類、量について南に聞いたことが

ある。南は「そこらへんの砂利で、一合升いっぱいくらいでいい」と答えた。しかし、筆者らが試したところでは望む音は出ず、やはり小豆の方が良い音が出せた。このように、小道具の総体が有する特性は、そこから生み出す表現を限定的にしてしまう傾向をもつ。

狭山市立博物館における「波ざる」の公開と体験は、「波ざる」から小豆がこぼれないようにしながら波の音を出す揺すり方とその加減がわかっても、それが作品の中での「良い音」には直線的には結びつかないことを改めて明確にした。つまり、記号としての波の音であれば、理想的に設計された「波ざる」を使うことで誰でも比較的短時間の経験で作り出すことができる。しかし、映像の波に音を合わせるとか、波の打ち寄せ方とその変化を作品の情感などと関係させて表現するといった南の「音の演技」は、その音が出る道具の選択と使用時間ではなく、幾本もの脚本を読んだ上での経験と幾種類もの演技の経験の積み重ねによる、いわば暗黙知の領域に至った結果であり、深い経験と確かな技能が求められていることを示している。小道具の保存と併せて音作りの思想の継承とその方法の重要性を、「波ざる」の復刻を通じて改めて確認するものである。

6. おわりに

前述のように南に試用してもらい、その音をデジタル化・保存したいと考えていたが、不可能となってしまった。復刻「波ざる」およびそれで作られる音を、今後どのような形で保存・活用していくかは大きな課題である。国内の職人技を持つ音響効果技師は2名となり、この方達の技術・音も保存して行かなくてはならない。

今回の復刻作業を進める中で、見えてきた別の問題がある。それは、これまで日本文化を支えてきた職人技が絶滅寸前であるということである。大久保国夫によれば、竹籠職人は埼玉県西部にはかつてたくさんいたが、現在実用品としての竹籠で生計を立てる職人は現在きわめて少ないということである。

団扇に至ってはさらに少なく、越生団扇はかつて一大産業であった（埼玉県庁、1875）が、現在1店を残すのみになってしまっている。プラスチック製品に押されて竹籠が、空調家電に押されて団扇が、危機的狀態に追い込まれていることは否定できない。ライフスタイルが変化してしまった今日、竹籠や団扇を日常的に生活で使用することは困難であろう。残念ながらかつてのような隆盛は望めない。

笠羽（2004）は著書の中で、「職人の完璧な跡継ぎがいなくて嘆くままに、すべてがなくなるよりも、多少記録と資料が残り、新しい産品が産業的に成功を収め、平行して新たなデジタルアーカイブという形で記録が残っていく、これも1つの次善の形態であろう」と述べている。たしかに、デジタルアーカイブによる記録がベストであるとは言いがたいが、何もせずに消えて行くのを見ているだけで良いはずがない。効果音だけではなく、竹籠や団扇の職人技もデジタルアーカイブの対象にすべきであるといえる。しかし、人的・費用的な負担を、誰がどこまで行うのかという問題が出てくる。国家的なプロジェクトとして、これを推進してくれる組織が設置されることを切に希望したい。

これとは違った問題点もある。職人技の中でも重要な要素である「勘」や「コツ」といったデジタル化がきわめて困難な対象を、どう処理するかという点である。これに関しては、その職人技を研究している研究者に参加してもらい、対象の詳細な分析から始めることが不可欠である。そして、デジタル化されたデータを研究者だけでなく、職人その人に検証してもらうことも重要だと考える。この検証作業がPDCAサイクルのC（check）となって、サイクルが円滑に回転するようになれば、“より使えるデジタルアーカイブ”の作成が可能になっていくものとする。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、デジタルハリウッド大学大学院客員教授の西尾安裕氏には各調整でお世話

になった。先述のとおり、竹籠製作では大久保竹籠店の大久保国夫氏、渋紙貼付ではうちわ工房しまのの島野博行氏にお世話になった。講演会では狭山市立博物館大谷武志氏および内出智美氏にお世話になった。記して感謝申し上げる。

また何よりも、南二郎氏には全面のご協力いただいたことで、今回のプロジェクトが推進できてきた。しかし、本当に残念なことに氏は2010年6月23日、他界された。心より感謝申し上げるとともに、ご冥福をお祈りいたします。

文 献

- 笠羽晴夫 (2004) デジタルアーカイブの構築と運用. 水曜社, 191p. 東京.
- 大久保博樹・野村正弘 (2010) アナログ効果音のデジタルアーカイブ化. コミュニケーション文化: 跡見学園女子大学紀要, 4, 45-53.
- 大久保博樹・野村正弘・斎賀和彦 (2010) デジタル

情報時代における職人の技能による音響効果への考察～シンポジウムの報告と今後の課題～.

駿河台大学文化情報学紀要, 15, 13-24.

埼玉県庁 (1875) 越生村. 武蔵国郡村誌, 第5巻, 82-85.

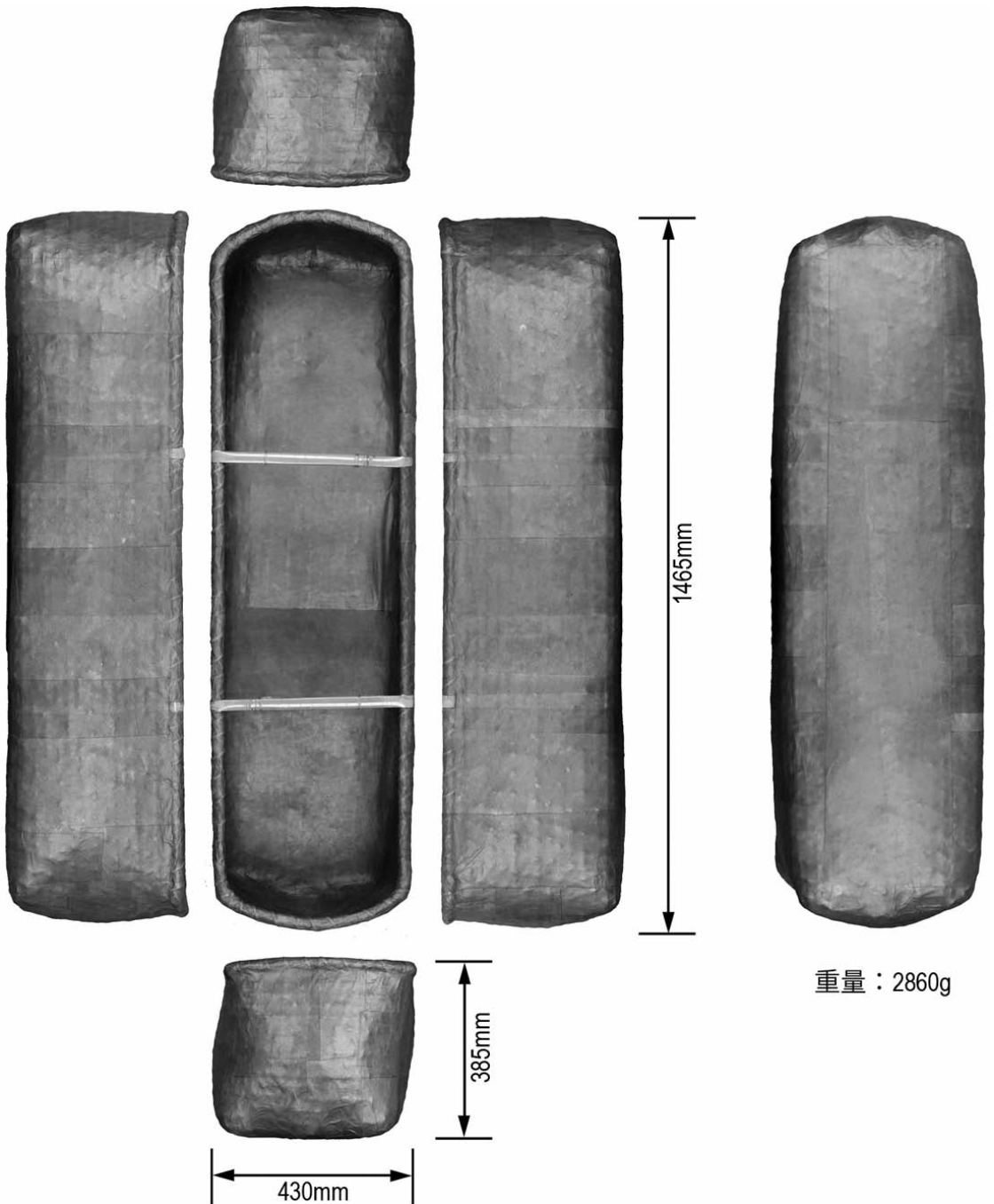
日本音響家協会編 (2001) プロ音響データブック—三訂版—. 株式会社リットーミュージック, 220-222.

Web サイト

駒ノ旺工房「編組パターンのいろいろ」

〈<http://ww3.tiki.ne.jp/~kondou/henso/henso.htm>〉
(2010年10月10日検索)

本研究は平成22年度駿河台大学特別研究助成費 (「音響効果技師による効果音の制作技能及び思考過程のデジタルアーカイブ化と公開」研究代表者: 大久保博樹、研究分担者: 野村正弘) を受けて行った。



付図 復刻「波ざる」6面観

**Regeneration of “Namizaru” (bamboo basket for wave sounds making) and current state that surrounds craftsmanship
Masahiro NOMURA and Hiroki OHKUBO**

[Abstract] “Namizaru” (bamboo basket for wave sounds making) was regenerated. It was assumed the chance to set the event that the civilian experienced reprinted “Namizaru”, and to recognize the importance of craftsmanship again. It has been understood that it is very difficult to produce even the presence matched to the image though it is comparatively easy in the experience to make wave sounds. Moreover, the succession of the thought of the sound making along with the preservation of properties and the importance of the method were confirmed through the regeneration of “Namizaru”. In addition, craftsmanship such as the bamboo baskets and “Uchiwa” (Japanese handy fans) that have supported the Japanese culture up to now is immediately before extermination, and preservation and the legend that uses the digital technique are pressing needs.

[Key Words] “Namizaru” (bamboo basket for wave sounds making), sound effects, preservation, regeneration, craftsmanship